

「竹ン芸」は、長崎市伊良林地区にある若宮稲荷神社の秋の大祭。竹ン芸は、稲荷神社のお使いである狐が若宮社のご神徳を慶んで、裏の竹やぶで遊ぶ姿を模したものであるという。白狐（男狐・女狐）に扮した若者が約十一メートルもの青竹の上で、妙技を披露するのだが、そのアクロバティックな演技に、見る者はハラハラドキドキ。二匹の狐は大きくしなる青竹の上で、命綱も付けずに、次々と大技を決めてゆく。

さぞかし長期間の稽古が必要だろうと思ひ尋ねてみると、宮司の大坪丈夫さんは、稽古期間はわずか十日ほどだという。「竹は乾燥すると、折れたり割れたりするため、切り出してからの寿命が二週間ほどしかありません。竹によってしなり方など個性がありますから、本番と同じ竹で稽古しなくては意味がなく、必然的に稽古期間が限られてくるのです」。

稽古期間が短くても、彼らが立派に演技ができるのには理由がある。竹ン芸には、子どもたちによる子狐も登場するのだが、白狐のほとんどが子狐の経験者だという。子どもたちは五メートルの高い竹の上で、しかも面を付けた狭い視野の中で、恐怖心と戦わなければならない。大坪さんは「恐怖心を

克服するためには稽古は当然のことながら、これが神事であり、奉納だということを中心にして置く、ということが大切だ」と話す。子どもたちは、これが神様に喜んでいただくためのものであることを教えられ、言葉遣いや身なりに至るまで指導される。もちろん稽古は、礼に始まり礼に終わる。そうして心身共に充実した者だけが、本番で演技をすることを許されるのだ。

竹ン芸はスリリングだ。しかし決してエンターテインメントではない。私たちが見ているのは、幼い時から心を鍛え上げた者が、命を懸けて神様に奉納している姿である。

# 竹ン芸

長崎市伊良林地区

命懸けで  
神様に  
喜んでいただく。

長崎の祭り



幼い子狐の演技は本当にかわいらしく、観客も大喜び。

